

秦野市青少年指導員だより

第40号

発行/秦野市青少年指導員連絡協議会 編集/秦野市青少年指導員連絡協議会広報委員会



今年の夏、表丹沢野外活動センターで開催された「諏訪市・秦野市交流キャンプ」と、「二市四町交流キャンプ」子どもたちが広げた交流の輪について、古谷義幸秦野市長と、事業を支えた二人の高校生ボランティアが紹介します。

自然の中で触れ合い 広げた交流の輪

海から山へ

一市四町青少年交流

秦野市長 古谷義幸

秦野市の市制五十周年の記念事業として始まった「青少年洋上体験研修」。これは東海大学の海洋調査研修船「望星丸」に中学生が乗船し二泊三日の交流研修を行うものですが、昨年七月からは、交流の輪を広げ、近隣の二宮・中井・大井・松田町の中学生も参加する広域提携の洋上体験として実施されました。この船上には一市四町の中学生とそれの首長や教育長がそれぞれ。そこで、青少年育成のため「洋上サミット」を行い、その結果、我が秦野市で、「一市四町青少年交流キャンプ」を実施することが決まりました。

今年八月二十日、一市四町の小中学生八十八人が表丹沢野外活動センターに集まり、交流キャンプがスタートしました。開村式で出会った子どもたちの顔は、これからの未知への期待でやる気満々でした。一泊二日という短い間で、マトを類張った農業体験、九種類にも及ぶ豪華な夕食作り、キャンプファイヤーなど様々な交流メニューを、知り合った仲間同士が一致協力し、行動していました。このような体験を通して、子どもたちは自分で考え行動する、仲間と協力し合う、他人を思いやる心を育む等々：。きつと大きな収穫を得たものと思います。また、子どもたちを温かく見守りサポートしてくれた高校生ボランティアを、はじめ、青少年指導員や子ども会の多くの皆さんの「地域力」も見逃せません。「地域力」も担う子どもたちが、出会い、触れ合い、視野の広い考え方を育んでいく、この交流キャンプが、さらに発展していくことを期待しています。

1 市 4 町
交流キャンプ

高校生ボランティア
の立場から

高校生ボランティア代表
佐藤雄大(高校三年)



「新しい試みとして、一市四町の子どもたちによる交流キャンプをしないか」という話が秦野リーダー研修クラブの会長である僕に持ち掛けられたのは、ちょうど一年前のこの時期だったと思う。「やりたいです」と、すぐに副会長の海平寛太郎と返答したが、中身についてはイメージがあった訳ではなく、少し甘く考えてしまっていた。いざ話を聞いてみると、各市町から参加者を集め、全体の人数が百人を超えるという未だかつて体験したことのない規模のキャンプになるという。

期待と不安を抱えながら準備を進めることになった。実行委員会を組織し、行政や子ども会育成連絡協議会、青少年指導員の方々との連携をお願いしたおかげで、様々な意見をいただくことができた。指導員の方々のサポートが心強かった。このキャンプを、市交流キャンプや子ども会行事に率先して参加する、高校生の輪を広げるきっかけとしたいという思いがあった。そこで、スタッフの呼び掛けを、リーダー研修クラブという枠組みではなく、広く高校生ボランティアという視点で行った。

参加する一人ひとりが、これから先、リーダー研に所属することを、あるいは新しくボランティア団体を作ったり、ボランティア活動ができるという期待を込めてのだった。その間、呼び掛けに際して、リーダー研のメンバー以外に、見ると僕が参加を表明したのを見た。初めは賛同しなかったが、やがて相容れな

いところもあった。また中には、こういったキャンプに参加するの初めてという小さな子どもと接したことがないメンバーもいた。だが、そういつた不安もすべて僕の取り越した苦労で、当日は、みんな期待以上の活躍ぶりだった。キャンプが始まると、思いがけない不安要因がいくつも出てくる。「一人でいる子がいらないか?」周囲に「行って行けない子がいらないか?」怪我をした子がいらないか? など細かいところまで注意しなきゃいけない。高校生ボランティアの全員が、みなそれぞれに子どもたち、僕達にとっても楽しいことができたのではないかと



諏訪・秦野
交流キャンプ

交流キャンプを通して
秦野リーダー研修クラブ
海平いぶ紀(高校一年)

と思う。来年は彼らが機会を作ってくれよう。拡げたい。もちろん、子ども育成課をはじめ、子ども会育成連絡協議会、青少年指導員といたった方々のサポートがあったからこそ、初めてこのキャンプが実現できたのだと思う。この場を借りてお礼を言いたいです。ありがとうございます。

今年、長野県諏訪市との青少年交流キャンプを通して、私がリーダー研(秦野リーダー研修クラブ)の通称です)スタッフとして学んだことを書きたいと思っています。実は、リーダー研に入ってから、これが初めてのキャンプでした。そのため、ダンスやゲームなど事前の準備がなければならぬ大変でした。

親子防災体験キャンプ

九月十九・二十日の二日間、南が丘小学校体育館で、南地区青少年指導員の新しい親子ふれあい企画「親子防災体験キャンプ」が開催されました。盛況のうちに終わったキャンプの様子を、実行委員長の溝口雅之さんに報告していただきました。

学校に泊まるって

どんな感じ？

新潟中越地震の際、山古志村の多くの子どもたちが、突然の避難生活を余儀なくされました。学校の体育館での集団避難生活に戸惑い、動揺する子どもたちの姿をテレビで見ました。新聞では、地方でも核家族化が進んできている現代、両親以外との共同生活を経験したことのない子どもが増えてきており、それが子どもたちを混乱させた原因の一つではないかという分析もなされています。

ならば、平穏な今こそ、親子そろって学校で一夜を過ごしてみることは、子どもたちには貴重な体験となるのではないか。そんな想い



から今年の親子ふれあい企画をスタートさせました。

ワイルドなプログラム

普段の指導員の活動は、子どもたちの笑顔を願って性の要素が強い『防災』をどう取り入れていくかが課題でした。だが実際に災害が発生した場合、避難所での子どもたちの笑顔が、何より求められるのではないのか。

そこで今回は、秦野市防災士会の方々に協力してもらった防災体験以外に、避難生活の不自由さを逆に楽しむという視点に立ったプログラムを工夫しました。

各自に毛布や寝袋を持ってきてもらい、高さ八十センチ、辺り振られた高さ八十センチ、

ション(仕切り)内で宿泊してもらおうことにしました。夕食は、市防災課よりアルファ米の提供を受けるほか、南が丘ウエルシー自治会には豚汁の炊き出しをお願いしました。燃料は全て薪を使い、さらに指導員ならではの企画として、切り出した炊飯にもチャレンジしてもらいました。また、大人数が A E D や三角巾の使い方等の講習を受けている時間帯は、子どもたちだけで楽しめるゲームや工作の時間としました。

ジュニアリーダーの活躍

南地区では、中学生を中心としたジュニアリーダーの育成を行っており、今年度も二十九名が指導員と共に活動しています。

今回、大人たちのプログラムと並行して、即席の担架作り、またゲームや紙飛行機作りなどで、飽きさせることなく子どもたちを引っ張っていったくれたのが彼らでした。

夜には、防災の意識を啓発する紙芝居や絵本の読み聞かせ。とかく退屈になり

がちなこういった啓発教材も、ジュニアリーダーたちの手にかかる、子どもたちの手を取り込む楽しい出し物になったようです。

夜九時半に消灯。少々固い床ではありましたが、騒ぐ様子も無く、みんな静かに眠りについていました。

キャンプを終えて

当日は、南が丘・南小学校の親子五十六人が参加し、スタッフとして防災士六人、南が丘ウエルシー自治会六人、ジュニアリーダー八人、指導員十六人が協力してくれました。

一晩でしたが、学校に泊まるという体験を通して、災害時での避難生活を少しでも理解することができ、参加者にとって貴重な体験となったことと思います。

ご参加・ご協力いただいた全ての方々に、改めてお礼申し上げます。

《広報委員》

◎委員長 ○副委員長

◎久保(東)

○佐藤(大根)

藤澤・込山(本町)

菅沼・竹内(南)

長澤・吉富(北)

武藤・林(西上)

一・西村(鶴巻)